棋士の情景

～勝負の厳かさは、どんな時代も変わらない～

棋士・九段　島　朗

（第22話）

制度の改正

いまはもう秋ですが、2026年度の棋士総会は初夏に行われました。毎年だいたいこの時期に開かれることが多く、近年は会員も増えたため将棋連盟の近くの会場を借りる慣例になっています。新四段の冒頭挨拶からはじめ、二年に一度の役員改選やその年の議題を話し合います。

かつては、旧会館の和室大広間で開かれていました。会計報告が前半にあるのですが、数字の羅列と説明が昔の先輩方は苦手な方が多く、始まってしばらくすると、休憩室にあんパンや飲み物が用意されているため、そちらで早くも休んでいる人も少なくありませんでした。

人間は好きなことに集中すると時間を忘れますが、盤面と違って会議となると別人のように棋士の皆さんの集中力が続かないのも、面白いなと感じていました。

ふだん対局では正座で通す方も、ゆるく胡座で構えていました。良きにつけ悪しきにつけ、牧歌的な雰囲気があったのかも知れません。

総会はふだん、東西に分かれている棋士同士など、めったに顔を合わせない方とお会いできる機会でもあり、特に若手のうちは楽しみにされている人も多いのではないかと思います。

今年は、奨励会から四段（正会員）になる場合の、三段リーグ次点２回ですぐに順位戦（C級２組）に参加できるようになる議案が、賛成多数で可決されました。昨今の三段リーグは実力的にも優れた若者たちがしのぎを削っており人数的にも飽和状態で、次点２回で直接順位戦に出られないフリークラス編入、という制度は全く現状に即していないと思われていました。

フリークラスというのは棋士の格付けの基になる、順位戦に参加しない棋士のことで、ここから一定の好成績を上げないと、順位戦に参加できないルールがあります。私のように長年順位戦を指してきて、年齢と共に力が落ちてきてフリークラス転出、という場合がほとんどで、若い人が長くいる場所ではありません。

今年度でいえば順位戦を指す新四段が４名、フリークラス編入が３名と、記録的な新会員ラッシュの年でした。その３名の実力も折り紙つきで、例えば古井丈大四段など、彼が三段の時に自分も練習でお手合わせさせてもらいましたが、普通にまず６連敗しました。これだけなら別に驚くこともないのですが、問題は６局中で自分の良くなった局面がないことに感服しました。人柄もすばらしい彼をとても応援していたので、今回四段になれたことはとても嬉しかったですし、規定の成績をあげるのも時間の問題で、ほかのフリークラス編入２名も同様と思います。

優秀な若者の門戸を広げることは大事ですが、連盟本体の運営を考えたときそれは同時に、棋士の引退に関しても手をつけなくてはいけないということです。いつの時代も、非常に難しい運営判断といえます。

夕方前にはほかの議案も概ね妥当な結論で落ち着き、総会が終わればさあ順位戦、という気持ちに切りかえる棋士は多いように思います。